

令和七年十月十三日 金光教上野教会

生神金光大神大祭教話

講師 金光教若狭教会長 岩谷和明先生

講題

「伝わる」

只今は上野教会の生神金光大神大祭を麗しくお仕えになり、共々に参拝のおかげを頂きありがたいことでございます。上野教会にご縁を頂き二回目の御用をこちらの教会長先生から頂きました、四代金光様が「御用は断れるもんかねー」、「出来るからするんじゃねえ。出来ないからさせていただくんじゃ」とおっしゃられたということです、ありがたくおかげただかせてもらいます。

改めまして、若狭教会の岩谷和明と言います。

若狭教会の初代は河野源吉と言いますが、初代は安政元年(1854年)に滋賀県大溝村勝野、今の大溝教会のある辺りで、濱田與兵衛の長男として生まれ、明治10年、23歳の時、ご縁があり大溝村打下の河野七左衛門の長女ぎんと結婚して河野家に婿に入り、河野源吉となります。

明治20年頃、奥さんのぎんさんが近所の人に誘われ、大津真町の金神様へ船で初参拝しました。当時教会は神道金光大教会大津支所で、その日、大津の先生は信者さんと共に御本社の御大祭に参拝中でご不在で、伊賀上野の初代、近藤伊三郎先生が留守

番でおられました。

ぎんさんが、『私は小さいときから、運の悪いものでして、私の思う様になりません。心の直るよう御願ひ申します』と言うと、伊三郎先生に『神様の御縁のある人ならば、死にハズレの病氣が出たら御蔭の端やと思ひなされ』と教えて頂き、御神米をいただきました。

それから、一年ほどして、夫の源吉が大患に罹り、医薬の効き目もなく、近くの白髭神社でおみくじを見てもらうと、「坂に車を押す」とし。油断すれば後ろへ戻るがお前の家には尊い神がある。これに頼めば助からんこともない」と申されたのですが、誰も心当たりが無く、さあー何様であろうと親戚一同集まり相談中、妻のぎんさんが思い出し、大津の金神様に参って御札（御神米）をもらつてきてあると言い、タンスの上の引き出しから取り出し、塩で清めて榊や灯明上げお祀りして、その後、日一日と快方に向かい、三カ月ほどして全開のおかげを頂き、夫婦揃つて金光教に入信しました。

源吉先生が大津で修業中には、大津初代のお母さまより、「私の生まれた若狭にも難儀な人が沢山いるから、このお道を広めて頂きたい」との願ひを受け、若狭に布教に出

ます。若狭教会を開教後も福井教会の布教にも尽力、さらに、初代の長女は諏訪教会の初代の奥さんに、次女は福知山教会二代青木惣三郎先生のもとへ嫁ぎ、初代の長男は福井教会の初代に、二男はその副教会長に、四男は小松で修業後、若狭の二代になりました。また若狭の信徒が高岡教会で修業後、小松教会の初代になり、金沢の二代も若狭の信徒が天津で修業後、菅原姓となり金沢へ二代教会長の御用にあたられています。

源吉先生自身も大正9年、65歳の時、上野の初代先生との話し合いで、奥さんを若狭に残して、単身名張に布教に出られて3年後名張教会の認可が下り、その5年後、名張にて73歳7か月で御帰幽になられます。

と言うことで、上野教会とは非常にご縁があり、そこでまた御用いただけるのは本当にありがたいことであります。

私は岩谷で河野ではないのですが、先代教会長の次男で、実家が仏教で長男だった父が昭和43年、鯖江に嫁いだ妹たちが反対する中、家や畑を処分し、家族4人で若狭

教会に養子に入つて、親は岩谷から河野になつたのですが、子供二人は岩谷のままですの
のまま現在に至っています。

私としては、河野になつていたかつたと思うのですが、父は長男だったので岩谷の名前
も残したかつたのかなと勝手に思っています。

本日は、私の伝えたい、今年テレビで非常に感動した映画と、お二人の先生の教話の
お話を聞いていただきたいと思っています。どうぞ楽にお聞きください。

今年は戦後80年と言うことですが、若狭教会では初代の孫が大変な被害に遭つてい
ます。初代の四男で若狭二代の房吉先生の長男正吾さんは、大阪の日本生命で働いて
いましたが、昭和11年からは、若狭教会の副教会長の御用をされていました。昭和19
年5月戦地に召集され、昭和20年6月大阪高射砲部隊より傷痍軍人として招集
解除され若狭に戻りますが、翌年静養中に30歳で御帰幽。その正吾さんの長女は昭
和18年12月一歳十か月でご帰幽。次女は昭和20年12月、一歳九カ月でご帰幽。

それまでも、二代の二男は昭和12年6月17歳で、二代の奥さんは昭和13年12月41歳でご帰幽になられている中。さらに、二代の三男は昭和19年2月6日、クエゼリン島で玉砕戦死。19歳5カ月でした。

アメリカ軍は圧倒的戦力で昭和19年2月2日にクエゼリン島に上陸から、簡単には制圧します。それでも、日本軍は抵抗し、アメリカ軍は5日には日本語で投降するよう呼びかけますが、その頃の日本軍は捕虜になるくらいなら戦死もしくは自決せねばならないと考えていた上官は、翌6日、無駄な総攻撃をかけ全員玉砕戦死します。

また、初代の二男は福井教会の副教会長でしたが、大正6年33歳10か月でご帰幽。その時、一人娘の道枝さんは2歳でした。3年後、若狭初代が名張に布教に出る際、5歳のこの道枝さんを連れていきます。道枝さんは翌年、若狭に帰り、昭和17年3月25歳の時、福井市で塚本磯八さんと結婚、女の子二人に恵まれます。しかし、昭和二十年七月十九日 福井市にB 29が120機で9500発の焼夷弾を投下、一晩で市街地の95%が消失します。中心部では熱さから逃れるため、県庁のお堀や足羽川の河原

には沢山の人が折り重なるように亡くなるなど、死者千六百名という大変な被害に遭います。

この時、塚本磯八さんは亡くなり、二人の女の子と奥さんは命からがら若狭教会へと避難しますが、二歳の長女千代子さんは、昭和20年十月に、一歳の次女八枝子さんは、翌年1月にご帰幽。その年の暮れには、母親の道枝さんも28歳でご帰幽になります。

もし、戦争が無かったら、今頃若狭教会はもつと違った道をたどっていただろうと思うと本当に残念に思い、亡くなられた方々の分も御用をさせて頂きたいと思っています。

15年前の2010年7月12日、福井県敦賀市のきらめきみなと館で東近畿教区の平和集会が開催されました。その時上映した、「硫黄島からの手紙」の監督、クリントリーストウツド氏は

『日米どちら側とすることなく、日米どちらにとっても虚しいものだ』、『ずっと前から、そ

して今も人々は政治家によつて殺されている』と言つていましたが、本当にそうだと思います。

日本軍は精神力を極端に重視、陸軍の教科書『歩兵操典』には、攻撃的精神は物質的威力をしのぎ、少ない兵力でも、多数の敵を破れると書かれていました。

クエゼリン島にしても、硫黄島にしても日本とアメリカでは戦力が全く違い勝てるはずの無い戦いに、何万人もの人が強制されそして玉碎していきます。

陸軍と海軍の責任のなすりつけ、アメリカ軍の戦力の情報収集力の甘さ。真珠湾攻撃ではアメリカの空母は他にいて被害にあいませんでした。日本軍は取り逃がした空母を壊滅するべく、ミッドウエーを攻撃し空母をおびき寄せ攻撃するはずでしたが、アメリカの通信暗号解読チームは『AF』を攻撃することをつかんでいて、アメリカ軍はAFを確認するべく罫を仕掛けます。ミッドウエーには水がないと信号を発信。すると日本軍が反応し、『AF』には水が無いと『信号を送り、アメリカにミッドウエーに攻撃することを知られ、日本の空母4隻と艦載機248機がミッドウエーに向かう時には完全に読まれてい

て、アメリカの空母3隻と艦載機と島の航空部隊359機で途中で急襲を受け、空母と艦載機すべて喪失し三千人以上が戦死しました。この戦い以降、日本は完全に航空権を失います。

いそろく　なぐもちゅういち

山本五十六や南雲忠一司令官にも責任はあるが、東京の市ヶ谷の地下十五mにあった大本営で現地の事を知らないものが、会議をして間違った指令を出し続けた。

私が思う一番悲惨な戦いは、ガダルカナル島の戦いで、日本はこの島に飛行場を建設しましたが、完成間近にアメリカに占領され航空権を奪われます。

この時も大本営は、本格的には翌年からアメリカが攻め込んでくると思っていて、大本営は800人の兵をガダルカナル島に送りますが、この時、アメリカ軍は、一万三千人で上陸し大量の兵器により、海岸線で日本軍のほとんどがなくなり文字通り海岸線は血の海となりました。その後、日本軍は少しづつ兵を送り込みますが、輸送船は敵の戦艦の攻撃で沈没し、食料も兵器も島には届きません。結局二万人がなくなります。が、そのうち一万五千人は戦争ではなく、ガリガリになり飢餓やマラリアなどの病気で

お亡くなりになるという悲惨な戦いでした。

今年の夏にはテレビでいろんな戦争の映画があつて、『あの花が咲くあの丘で、君とまた会えたら』も現代に生きる女子高生がお母さんと喧嘩して家を出ていき、雷雨で防空壕に避難していたら終戦間近の特攻が暮らす時代にタイムスリップするというあり得ない話ですが、特攻の彰に助けられ陸軍指定の『鶴屋』と言う食堂で働くのですが、実際には特攻に行く前にご飯を食べた食堂『富屋食堂』の鳥濱トメさんは特攻に行く隊員に自分の服を売ったりして、いい食事を食べさせたり、家族への手紙を預かり近くのポストに投函すると検閲で届かないかも知れず、わざわざ遠くから手紙を投函したり、知覧まで出撃を見送ったりと実話と重なる部分も含まれていてよかったですし、あと、別に何とも思わずに見ていたら、どんどん引き込まれたのが、『ラーゲリより愛を込めて』という映画で、ご覧になった方いらっしゃいますか？

ラーゲリというのは強制収容所のことで、満州で家族と生活していた日本人が終戦間際にいきなり参戦してきた、ソ連軍によって抑留連行されシベリアで強制労働に従事さ

せられた男たちの物語で、この映画のあらすじを紹介させて頂きたいと思います。

この映画で主演の二宮和也さんが演じている山本幡男さんは実在の人物で、第二次世界大戦後、ソ連によって日本人約60万人がシベリアへ抑留され、6万人が過労や寒さ、飢え、また伝染病などで命を落としました。

ソ連は1947年、日本と中立条約を結んでいたんですが、力による現状変更、国際秩序の破壊をやるソ連。現在もウクライナで同じことをやっていますが、その条約の期限が切れる前の1955年8月9日、長崎に原爆が落とされた日にソ連は満州に攻め込み日本人や民間人を拉致。最長13年間拘束しました。これがシベリア抑留です。

昭和31年10月19日、日ソ共同宣言、調印によって国交が正常化しますが、シベリアからの最後の引き上げ船『白山丸』が舞鶴に到着したのは、東京タワーが完成した、私が生まれた年の昭和33年の9月6日でした。

戦争はとづくに終わっているのに抑留が続いていたことに驚きました。と言うのも私はこ

の舞鶴の引揚記念館や近くの引き上げ桟橋も二回も行っていないながら、そのことを知らなかったからです。この場所は舞鶴の町中から少し離れた寂しいところにあり、原爆資料館のような衝撃を受けたのを覚えています。

今ではユーチューブで『舞鶴引き上げ記念館』で検索すれば色々出てきて、簡単に中を見ることが出来ます。一年前に、『舞鶴引揚記念館の紹介、映画「ラーゲリより愛を込めて」の舞台』というユーチューブ動画は、実際にそこに行ったように中を見れるのでお勧めです。館内には『白樺日誌』という抑留者が白樺の皮に、空き缶を加工しペンにして、ススを水で溶かしてインクにして、日々の思いや和歌が書かれたもので家族や故郷への思いが綴られています。収容所での所持品検査や引き上げ時の検査も奇跡的にすり抜け、没収を逃れ日本にたどり着き、今はユネスコ世界記憶遺産に登録され、この引き上げ記念館に展示されています。

ラーゲリでは、ソ連は捕虜を管理する上で、日本軍の階級秩序を利用し、これが悲劇を大きくしました。戦争は終わっていても、「上官の命令は絶対」だった。上官はこの秩

序を利用し部下をこき使うことがあった。自分は重労働せずに部下たちに働かせる。そして、ただでさえ乏しい食料なのに下級兵の食料を横取り、暴力も横行した。このような場面は違う戦争映画でもたびたび見る光景です。

山本さんは、東京外国語学校でロシア語を学び、1936年満州に渡り、南満州鉄道の調査部に配属され、以後ソ連の経済や社会、軍事などの分析を担当。当時のインテリであり、ロシア通でした。日本の敗色が濃くなっていた、1944年、山本は家族に、日本は戦争に負けるから日本に帰れと言います。そして、山本は陸軍に召集されハルピン特務機関に配属されます。抑留後この経歴があだとなりソ連は山本さんをスパイと断定し、裁判で重労働25年の判決を下され、1949年極東バロフスクの強制労働収容所に移されます。

冬は氷点下40度にもなる過酷な環境と重労働の絶望の中、山本さんは希望の光を灯します。「アムール句会」という日本語による文芸活動を広めます。

ソ連軍は日本人が集まることを禁じていたので、句会は秘密結社で下級兵や民間人

も参加し、家族や故郷への思い、季節の変化などを詠み、さらに「文芸」と言う小冊子を編纂、紙がないので作業場のセメント袋で紙代わりにしました。ちなみに映画では、ここは野球で抑留者のつながりを生んでましたが、

小冊子もソ連軍が極度に嫌う活動で、見つければスパイ容疑で投獄される恐れもあった。そんな活動を山本は主宰した。捕虜同士の精神的つながりを生み、強くする活動でした。ソ連側の理不尽な要求に体を張って抗議することもあった。優しい人柄と豊かな教養、勇氣。そこから生じる人望とリーダーシップ。山本は次第に捕虜たちの支柱となっていた。

しかし、のどに癌が見つかり、上司の原が山本の死期が迫っていることを悟り、遺書を書くことを勧める。それは、死亡宣告を突きつけることになるが、彼の気持ちに家族に伝えたいと、断腸の思いで山本にノートを渡した。山本はそれを受け入れ、翌朝には必ず家族に届けてくれと母と妻、三人の子供へ、そして遺家族のものたちへの計四通、4500字15ページの長文の遺書を書いた。その二週間後、山本は45歳で亡くなります。

しかし、ソ連の収容所では日本語の文書を書き残すことは、スパイ行為とみなされず、
て没収されていた。運悪く抜き打ち検査でこの遺書が見つかり、病死した男が残した、
まっとうな遺書でさえ没収され焼却されました。

つまり、この時点で山本の書き残した遺書は姿を消しました。ではなぜ妻の元へ届け
られたのか？遺書の没収を想定していた4人の仲間たちは、分担して内容を頭の中に
記憶したのです。当然、頭の中まではソ連兵も発見出来ません。

その後、彼らは自分の記憶部分を書き写し、写しが見つかれば一生帰国できないか
も知れない中、暇があれば見続け、一語一句鮮明に記憶に残した。

身を削つて覚える。まさに「体に刻むように」覚えていく。これはもう、暗記とかいうレ
ベルではない。体を使って、刻み込むように覚えたことでしよう。

記憶したものを開陳するのが何年先になるかもわからず、（実際山本の死後、家族に
伝えるまで三年程かかっている）それがため、自分の内部に強く刻み込む覚悟を持た

ないと覚えられない。覚えたら一生忘れることが出来ない。暗誦と言うより、さらに上の極限の身体刻みの作業となる。

遺書は四本あり宛先が違う。

四人はそれぞれ帰国後、別々に山本の家を探し、それぞれ遺書を伝える。

最初に訪れたのは、安田顕演じる、元上司の原が「遺家族のものたち」への遺書を伝える。

次に松阪桃李演じる松田が訪れ、「母へ」話しかけた。

三番目は中島健人演じる漁師の新谷で、「子供らへ」と呼びかける。

最後に訪れた桐谷健太演じる相沢は、「妻よ」と呼びかける。

遺書は、もちろん記憶者によって紙に書き写されている。

記憶者は家を訪れ、書き写した遺書を渡す。ただ、同時に声で伝える。

この映画の最大の見どころはこの「声で伝える」所で、

最初に渡した原は、遺書を渡して、家族がそれを広げて読み始めた時突如「山本幡男の遺家族のものたちよ…」と話し出す。驚いてみな、暗誦者を見上げる。遺族の顔を見ながら、当人になりかわつて遺書を暗誦する。山本はもはや死んでいるが、今暗誦されているのは生きていた時に書いた言葉であり、それを山本とずっと一緒にいた男が口伝えて伝えてくれる。時が巻き戻され、死んだ人間があたかも目の前に現れ、家族に語りかけているかのようなのである。

二人目の松田は、母に「お母さま、私はなんという親不孝だったでしょう。」とはじまる文章を暗誦しながら松田は、まっすぐ母を見る。

「一目でいいから… お母さんに会つて死にたかった。…一言二言交わすだけで、どれだけ私は満足したことでしょう…」 伝えながら松田青年自身がぼろぼろと泣き出し、膝から崩れてしまう。死んだ人の言葉であつても、身体に刻み込んだ人が肉声で再現すると、その人が見事に蘇る。

極限状態でも、強い思いさえあれば、人に伝わっていく。

全身全霊で伝えようと思えば、周りの人を巻き込んで、遠くまで伝わる。人は人を介してしか、思いを伝えられない。

神話や民話としていまも伝えられる物語は、人から人へと口伝えで受け継がれて来たから今に伝わっている。落語や講談もまた同じで、現在も続いている。

落語家でも若手の下手な人は、「落語テキスト」を覚えて読んでいる。と言う気持ちで抜けていない。

名人のレベルになれば、テキストは外から内に入れたものではなく、自分の身体の一部になっている。自分がかつて見聞きしたこととして、演じている。だから届く。

ラーゲリで遺書を覚えた4人は、異常な状況下で、ひたすら同文をただただ繰り返すしかなかった。努力して名人になった落語家と同じである。山本幡男の遺家族に会った時、伝言者の言葉は、強く強く伝わったことでしょう。

金光教も同じです。教祖様のみ教えを直信の先生が人々に伝えられた。明治27年以後に、教祖様のご理解を聞いている者、覚えている者は書いてご本部に提出するよう、という指令ができました。

それに呼応する一人、市村光五郎さんは提出にあたり、その前書きとして、『大谷の金神様へ巳の年が参る時、だれ一人も参詣の人がござりませずして、金光様より、金神様のお話を静かにいただき、我が家に帰り。またこの度、お言葉をさしあげ候。仮名書きにして、足らざるところは悟りてお広め下され候。もし間違ひあつたなら、末代の誤りなり。金光様を汚してはならずと思ひます。』と書かれた。これは今の分厚い教典の理解Ⅰ（金光大神御理解集 第Ⅰ類）は金光大神に直接接した信者、すなわち直信が自ら、教祖様から聞いた教えを書き記して伝えたもので、その市村光五郎の伝えの第1節がこの言葉です。

市村さんの職業は左官屋さんで、いわゆる当時の教養人・学問を修めた人ではありません。その市村さんが伝えておられるご理解が、この教典の中で一番多く、297節ほど

残されている。そして、文字を流暢に書ける人ではなかったと思いますが、丁寧に教祖様の御言葉を聞き、こつこつとお書きになっている。

市村さんは、今の岡山辺りに住んでいました。朝出発して夕方金光へ着いて一晚泊まつて、昼間の誰もいないとき、夜更けまで教祖様から話を聞いて、明るる朝早く発つて家に帰る。その間、繰り返し繰り返し思い起こしながら、家に帰つて書き留められておられたのではないかと想像される。『もし間違ひあつたなら末代の誤りなり。眞實を申し上げ、金光様を汚してはならずと思ひます。』

教祖様の御言葉を、本当のことを伝えたいという一念から、こつこつものを残している。

岡山から、往復100キロ余りの道を歩いてお参りになり、暑い日も冬の寒い日とか、そういう中でわらじで足にマメを作りながら、聞いてお帰りになった。その大変なご苦労があつて、我々がこつこつ一節一節に出会うことが出来る。一つ読めば分かりにくいとか、よくわからん、もつと丁寧に書いてあつたらとか、いろいろあるかも知れないが、しかし、その背後にそれだけの血のにじむような思いがある。その背後にあるものを読み取ら

せて頂きたい。『足らざるところ』は私たちの信心によつて、頂かせてもらわなければならないのだと思います。

話は変わりますが、前の教務理事でアメリカのサクラメント教会長の、大矢嘉先生が3年前、本部の月例祭でお話された内容ですが、大矢先生のつもりでお話させていただきたいと思います。

大矢先生の実家は仏教で先生は長男だったのですが、家族中みんな反対する中、20代後半の時、「金光教の教師にならせてください」と言ってお願ひし、金光へ行き、教師になり、本部で四年ほど翻訳の御用をされてた時、ある日、東京の妹から電話で、「母が明日手術するんだ。喉にメス入れて甲状腺切るので神経たくさん通つてるからね。お兄ちゃんどうなんだろう」と言うことでした。

すぐに、あつ、母のそばに行かせてもらおうと思つて。母に「教師にならせてください」と、お願ひしたときに約束したことがあり、その時に母に「何か家にあつた場合、私も長男ですからすぐ帰ってきますから」って約束してた。

ですから、最後になるかもしれない、ということもあるかも知れない。それで東京に上京しようと時刻表見て、病院の面会の時間はこの時間に終わるから、金光駅はこの時間に大体出るとか調べて、金光様の所にお届けに上がり、「実は母がこうこうで、手術を明日するので今日行かせていただいて、と御届けしますでしよ。

そしたら、四代金光様がね、また例のいつもの御礼の話をされるんですよ。御礼の話でね、いつ終わるか分からない。もう時間が気になってしょうがないんです。これ、あの電車に乗らないとまずくないかと思ってるわけですよ。

しかし、その時に金光様今日は列車の時間もありますし、あのー、ちょっと失礼します。と言えないじゃないですか。そんな失礼なこと言えない。せつかく教えをしようとしておられる金光様に対してね。だから、その時の御礼の金光様の教えというのは、私の頭の中には入っていない。今も覚えていないですよ。ともかく長い教えなんですよ。

そしたらね、私も腹をくくったんですよ。いいか、もう遅れても。母に会えなくてもいいやと思ったんですね。思っただけです。その瞬間、金光様が「今の心がええなー」って、こ

うおつしゃるんですよ。

ええーつて、「比べてごらん、ここにあなたが座った時と、今の心」つて。

「あー」て言っただすよ。そうでした。そうでしたって言うのは、私、母が反対してますので、金光様に以前お届けしたことがあつて、母に信心を伝えたい、母に信心が分りますようにお願いしたんですよ。

その時、金光様がおつしゃったのがね、「赤ちゃんの頃、おしめ替えてもらうたのを忘れるんじや」、「親の恩ですよね。忘れている。

さらに「二種類あるぞ。うちも主人に信心してもらえようお願いします。つて言うてくる人もいるし、あのー、主人に信心が分る私にならせてください。とお願いに来る人がいるんじやがなあ、後の方が早えーな。」「こうおつしゃるんですよ。

で、「あんたがご縁をいただいたことに御礼申させていたくださいな。」「とおつしゃる。で私はどうやったら一番近道でお蔭が頂けるかにかけてますから、あつそうか。母に信心さ

せるのではなくて、私が信心をして、それを見て頂ければいいんだ。と思うんですね。本当はね、金光様がそこで仰りたかったのは沢山あって、ものすごく深いんですよ。これ、後でわかるんですけど、その時は分からず、「わかりました、じゃあ信心させていただきます」ということになるんですけどね。

そのことを思い出したんですね。それで、「あつ」って言ったんですよ。金光様が、来た時の心と今の心比べてみよって言われて。来た時と言うのは、慌てふためいてですね、母に絶対おかげ頂いてもらおう、これで金光教の信心のすごさを分かってもらおうとして、変なところに力が入ったんですね。

それで、肝心のあんたがおかげ頂いて、母がおかげいただく。と言うのを忘れてしまっていたんですね。そこに気が付いたんで、「あー」って言った。

そしたら金光様は、「何でそうなるか分かるか」って聞かれるんです。「さあー」って答えましたらね、もうこの本部広前に鳴り響くような、ものすごい大きな声で、「普段から御礼の稽古が出来とらんからじゃろー」って、もうびっくりしましてですね、「ははー」

て言つて、その時の金光様の御礼の、普段からの御礼の稽古。で、それを本当に毎日毎日御礼を言う。そればかりなんです。「今日寒いなあ、でも元気で来れるからなあ、ありがてえなあ」と御礼を申している、金光様を見せて下さってます。

で、私何年間分のが一気に蘇りましたね。あの時も、この時も、もう極めつけはね、私がおのずい大反省して金光様にお詫び申し上げたら、金光様がね、「気が付かせてもらつたところに御礼申し上げたか？」つてこうおっしゃるんですよ。すごくないですか、お詫び、これが御礼の土台の信心という、金光教の教えなんですね。

そんなわけで、私も東京行くのに時刻表見ないですね。時計も見ない。気にしない。神様のみ。歩きながら、金光様に教えられた通りやるんですよ。

ここから金光駅に行かせて頂きます。歩いていかせて頂きます、ありがとうございます。金光駅着くじゃないですか。無事に着きました、ありがとうございます。と言つて改札をすつと抜けると、電車が入ってくる。15分に1本ぐらいしかないのに、すーつと入ってくる。ありがとうございます、電車が来ました。乗せて頂きました。ありがとうございます。

す。岡山駅着きました、ありがとうございます。そしたら、新幹線がまたすーっと入ってくる。恐ろしいくらい。

それで母に会えたんですね。閉まる前です。面会の時間があるんで。閉まる前に母に会えてね、しかもね、母に信心のことなど、これっぽちも言わないですよ。「お母さん大丈夫―」それだけなんです。「来たよ―」それだけ。それでおかげ頂いて、次の朝帰ってきましたね。

金光様おかげいただきました。一つ一つ金光様にもう嬉しくてしょうがないですね。頂いた、本当にすごいですねって言うて。もう金光様のおっしゃることに、ぴたりと合わせてくる神様の凄さ。それを守って行おうとする、何も知らない私にわかるようにして下さる神様。これは、とてつもない神様だという風に思いました。それから、金光様ありがとうございます。言うたら。「信心はやってみると分らんけん、それよかったな」とおっしゃった。

信心はやってみないとわからない。理屈ではない信心。そう自分に言い聞かせながら帰

宅しました。本当にありがたかったです。

これ、御礼を申すつて信心はあるんですけども、私、御礼を申すところなるかつてことをちよつと考えてみたんですけど、ちよつと考えてみませんか、御礼を申し上げる相手は神様ですよ。

神様ありがとうございます。心がその瞬間、神様に向くじゃないですか。ね、我が心が神に向かうのを信心と言う、とありますよねえ。で、御礼を申すだけでスポンと入るんですよ、そこに。で、気付かせていただく、あれも、これも、あの時も、あつ神様がおかけ下さっている。ありがたいありがたさが、ドンドンドンドン増えてくんですね。自分の中で。あーそうだったんだ、と振り返つて、全部おかげになつて変わっていく。

これオセロで、こう黒が白にポンポンポンと変わっていくように、一手見たら、これ御礼なんです。ありがとうございました。手石をぽっぽっぽと全部おかげに替わってくる。それ稽古すると瞬時に出来るようになるんですよ。その稽古をしなさいと、金光様が教えて下さったんだと思います。

母のことをずっと願っておりましたから、もう金光様ご存じですから、「ええか、あんたが伝えるんじゃないやねえんじや、伝わるんじゃない」これもねえ、すごいことだと思って、今も大事にしてるんですけどね。伝えようと思わない。金光教を広めようとするのはいいんですけど、しない。金光教はこうです言わないですよ。それで伝わっていく。何を見るかつて、私の信心だし、私の生活の仕方ですし、それは御礼土台の私の動きですね。

それを見た母がどうなっていくかと言うと、本当におかげ頂くんですね。癌が見つかって、もう一年の命だったんですけど、母は、お医者さんに御礼を申して、それから、こんな状態なのに「全然痛くないのよ、ありがたい」って言って、周りの人みんなに御礼を言うんですね。「ありがとう」って言って亡くなっていくんですよ。私、これ母は本当におかげ頂いたなあと思えるんですよ。自分は金光教の信者だとは言いませんでしたけれども、最後にね、「自分の葬儀はあなたにしてほしい、金光教で。で、サクラメントでもどこでもあなたが行くところに、私行くから」、言われたんですよ。

「ええーっ」って言って、うちは仏教じゃないの？いや、あなたの所に私が行く。ですか

ら。今もこうやって心の中にいるんですね。で、母にわかっていただく信心は今もお、御霊様に分かっていただく信心として、御霊様が立ち行く信心として続いています。

話は変わりますが、今から11年前、当時の金光図書館長の金光英子先生が本部の信行期間に、『本当のおかげ』というお話をされました。

それは、愛媛県の宮窪教会の開教60年記念祭で高橋信道先生の御言葉で、『本当のおかげが知りたいか？本当のおかげとはのう、天地のみ恵みをありがといただいて、天地の間の動きがどのように変わろうとも、有難い生き方が変わらないようになったら、これが本当のおかげを受けたというもんじゃ。それはのう、大嵐になろうが、大千ばつになろうが、大火事になろうがありがたい生き方が変わらないようになったら』ということですよ。

英子先生はこの大火事の所にびびつと反応して、先生の祖母が東京で三度火事にあっています。一回目は空襲なんです、三度目は88歳の時でした。家が焼けた。で長男の家も本宅も焼けました。その時にその祖母はどうしたかと言うと、教会に御礼参拜に

行っています。そして、『三つの御礼を言ってきたんじゃ』と、こう言いまして、

一人も怪我過ちが無かった御礼をした。

他の家に類焼をしなかった御礼をした。

残されたものがあるという御礼をして、「ありがたいなあ」というふうに言っており、そして火を出したお嫁さんに向かつて、「あなたが一番辛かろう。全財産をあげましょう。」と言って全財産をあげた。

英子先生はこれにいたく感動して、このような私にならせていただきたいと思いつつ、私だったらどうするか。「どうして、あんた火を出したんよ」とこういう風に言いそうですし、「明日から住む場所をどうしよう」と嘆きそうな気がするんですけど。

「この三つの御礼を言うて来たんじゃ。ありがたいなあ」と、こう言った祖母に、それまでは教会にも立ち入ろうとしなかったお嫁さん。この家は良いんだけど、金光教だけはちょっと、と思っていたお嫁さんが教会に参拝し、その足で金光教本部にお参りされたこと

を、大変、英子先生の祖母は喜びまして、「ありがたいなあ。神様はなあ、私の家を奪うてまでして、焼いてまでして下さって、信心を伝えてくださった。あーありがたいなー」と、それはもう本当に大変な思いの中であつたのかも知れないんですけど、その祖母は何をしなくても、例えば電車を待つのも、ちようど良かったというのは、私が金光駅に着いたら、ちようど駅に列車が来たのが、ちようど良かったという風に思う気がするんですけど、随分待つてもギリギリでも、どんなことでも、「ちようど良かった」って喜ぶんですね。

でもそういう生き方をしていたら、こういう大火事になつても、有難いと言ひ。信心が伝わった。そして、亡くなる時には、本当にありがたい言葉を残されました。「人は皆、そうどんなに幸せそうに見える人でも、みんなみんな悩みや難儀はあるものだ。人間の欲望にはキリがない。かなり良くても、もっともっととキリがない。足るを知ること、そして、感謝することが大切で、感謝すればその人の心が救われる。同時に回りも助かる。ありがとう、良くしてくれてありがとう」と言つて101歳3か月で亡くなられたというこ
とです。

このお二人の先生のお話は自分が特に大切にしているところであります。

話はまた変わりますが、私、今年1月5日朝起きた時に左足に違和感を覚えたんですが、子供を送る約束していたので、大阪まで車を運転し帰った時にちゃんと歩けないような状態になってましたが、足が悪いと思い、次の日整形の病院行ってレントゲン撮りましたが異常なく、そのお医者さんに内科でMRI撮ることを勧められ、小浜病院行くと、内科の受付は終わっていたので、救急外来で受付して、問診を受けると、もうその時点で、脳梗塞を疑われ、MRIの結果、右アテローム血栓性脳梗塞と言う診断で、さらに、その近くに以前脳出血をした跡があるとのことでした。二十日程入院していたんですが、最初の1週間は点滴ばかりですつとベッドの上で動けなかったのですが、リハビリが始まっても杖を突かないと歩けない状態でした。

リハビリで杖なしで歩こうとしたとき、歩き方が分らないんですね。それまで、考えたこともない、当たり前だった歩くということ。右足に体重掛けて左足を出すことは出来るんですけど、左足に体重がかけられないので右足が出せない。で杖を突きながら、段々と

杖に体重掛けないようにしていつて、何とか杖なしで歩けるようになっていきました。

退院後も退院したらすぐに良くなると思っていたんですが、3カ月ぐらいしても、左足は安定せず、正座も、しづらい状態でした。もうこれは後遺症で、ずっとこのままかなと諦めたりもしたんですが、普段お酒は全く飲めないのですが、ご本部で頂いた、直会の御神酒を毎朝小さい盃で少しずつ、お願いしながら、いただいてましたら、半年ほどして左足もよくなり、正座も出来るようになり、本当にありがたいことで御礼申し上げます。

それまで、当たり前だと考えもしなかった、歩くということも当たり前じゃなかったんだ。まさに、普段から御礼の稽古が出来てなかったと痛感した次第です。

今から、46年前に32歳でお亡くなりになられた、井村和清さんと言うお医者さんが残された、『飛鳥へそしてまだ見ぬ子へ』という本の中に、あたりまえという詩があります。

あたりまえ

あたりまえ こんなすばらしいことを
みんなはなぜ よろこばないのでしょ
う
あたりまえであることを

お父さんがいる、お母さんがいる

手が二本あつて、足が二本ある

行きたいところへ自分で歩いて行ける

手をのばせば なんでもとれる

音が聞こえて声が出る

こんなしあわせなことがあるでしょう

かし、だれもそれをよろこばない

あたりまえだと笑つてすます

食事が食べられる

夜になるとちゃんと眠れ、そして又朝が来る

空気を胸いっぱいにする

笑える、泣ける、叫ぶこともできる

はしりまわれる

みんなあたりまえのこと

こんなすばらしいことを

みんなは決してよろこばない

そのありがたさを知っているのは

それを失った人たちだけ

なぜでしょう あたりまえ

生きたくても生きられない命があります。無念のまま死ななければいけない命もあります。生かされていることに感謝をして、あたりまえのことに喜びを感じ、幸せを感じ、まわりの人に感謝をして、一日一日を大切に過ごしていただきたいと思います。

どんな時でもありがたい生き方が変わらない。御礼を土台にした生き方。

世話になるすべてに礼を言うところ。そういう私にならせてくださいと日々御願いしながらの日々を送らせていただきたい、というふうに思わせて頂いています。ありがとうございます。